

Title	井深八重とその信仰
Author(s)	菊地, 順
Citation	キリスト教と諸学 : 論集, Volume23, 2008.3 : 262-294
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4529
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

井深八重とその信仰

菊地 順

はじめに

「み摂理のままにと思ひししのびきぬ なべてはふかく胸につつみて」

これは、井深八重が詠んだ一句である。^① 井深八重は、静岡県しづやまの御殿場にある神山くまがは復生病院というハンセン病の療養所で、ハンセン病患者のために、看護婦としてその生涯を捧げた女性である。この病院は、一八八九年、明治二二年に、フランス人のジェルマン・レジエ・テストヴィドレジエというカトリックの神父によって設立され、約一〇〇年間に渡ってハンセン病の療養所として活動してきた。現在はその使命を終え、新たにホスピスとして歩み出しているが、この病院で、その生涯を捧げて、ハンセン病患者のために尽くしたのが、井深八重という女性である。

井深八重の生涯に関しては、牧野登氏が代表を務める井深八重顕彰記念会によつて、二〇〇二年に『人間の碑—井深八重への誘い—』^②が出版され、その沈黙に満ちた生涯の概要が明らかにされた。これには、八重に関する写真、

本人の文章、さらに八重に関係した人たちの証言などと共に、牧野氏の丹念な調査に基づいてまとめられた「井深八重小伝」が収められている。また、少し前になるが、テレビでも八重の生涯を紹介する番組が放送されたこともあり、³ 少しずつ、この女性の存在が知られてきている。

この井深八重について、特にその生き方について思いを深めるとき、そこには注目すべきいくつかの重要な要素がある。それは、何よりも、二二歳のときハンセン病と診断され、一旦はハンセン病療養所に患者として身を置いた八重が、それが誤診だと判明した後もそこに留まり、今度は患者の救済のために生涯を捧げることになったという、その数奇な運命である。しかし、さらに重要なことは、八重はそうした人生の偶然性に翻弄されながらも、その背後に神の「摂理」を見、信仰者として生きたということである。そしてまた、その働き自体が、今日の福祉事業の草分け的存在ともなったということである。一人の女性として、また信仰者として、そして福祉の精神の体現者として、井深八重は、今後ますます人々の記憶に留められるべき人物となっていくであろう。

すでに牧野氏の手になる八重の小伝が著されており、生涯に関しては基本的にそれに加えるべきことはないと思えるが、ただ、八重の生涯に感動し、特にその信仰者としての生き方に深い共感を覚えた者として、その点についてももう少し探ってみたいという思いを抱くに至った。そこで、蛇足ではあるが、八重の生涯を辿りつつ、その信仰の世界にわずかなりとも触れてみたいと思う。

一、生涯

すでに触れたように、八重の生涯に関しては牧野氏による小伝があり、以下の記述は概ねそれに基づくものであ

るが、しかしその内容は、信仰者としての八重の歩みに注目したものと成るであろう。また、そのために、隨時必要な補足を加えながら、その生涯を辿ることになる。

(一) 井深家

井深八重は、一八九七(明治三〇)年に生まれ、一九八九(平成二)年に九一歳で逝去した。したがって、明治、大正、昭和を生き抜いた女性である。八重の生涯を顧みるとき、まずその点が重要であろう。というのも、明治・大正期と現代とでは、ハンセン病に対する理解も社会的受け止め方も全く異なっているからである。そして、それはまた、ある程度キリスト教に関しても言えることだからである。八重は、その人生の初めから、キリスト教と深い接点をもっていた。というのも、八重の伯父であり、また一時育ての親でもあった井深梶之助は、明治学院の初代副総理・第二代総理として活躍した人物であったからである。

梶之助は、会津藩の藩校である日新館にしんかんの学頭であった父宅右衛門たくらえもんの長男として安政元年(一八五四年)に現在の会津若松市に生まれた。梶之助は一四歳のとき日新館に入学するが、間もなく起こった戊辰戦争に巻き込まれ、白虎隊に編入される。しかし、年齢が満たなかったため戦争には参加できず、藩主の小姓として籠城戦を戦った。その後、会津藩は降伏し、しばらくの謹慎後、斗南藩となみとして再興を許されることになったが、梶之助は藩命により東京に遊学、横浜の修文館で学ぶことになる。そのとき、そこで英語を教えたのが改革派教会の宣教師ブラウン(Samuel Robbins Brown, 1810-80)であり、このブラウンとの出会いが梶之助に強い影響を与えることになった。そして、一九歳のとき、ブラウンより洗礼を受けることになるが、それは「切支丹禁制」の高札がようやく撤去された年であり、後で見るように、それは命がけの決断であったのである。その後、ブラウンが開きたいわゆるブラウ

ン塾が明治一〇年東京一致神学校になり、さらに同一九年明治学院となる中で、その最初の副総理になったのである。その後、三六歳で留学し、帰国後は第二代総理として活躍したのであるが、八重はその実弟で、後に国会議員になった井深彦三郎の娘として生まれたのである。また、この井深家からは、後にソニーの創業者となった井深大も出ている。ところで、こうしたいわゆる名門の井深家出身の八重が、なぜハンセン病の療養所で看護婦として働くことになったかと言うと、そこには大きな偶然が介入していたのである。

(二) 「ハンセン病」の宣告

井深八重は、明治三〇年、前年に結婚した父彦三郎と母テイの長女として、台湾の台北で生まれた。しばらくして帰国し、東京で生活するようになるが、八重が七歳のとき、両親が離婚。その後父彦三郎は再婚するが、家を空けることが多く、そのため八重は物心がつく頃から芝区白金の明治学院構内にあつた伯父梶之助の家に預けられることになった。そこで、父方の祖母八代（会津藩筆頭家老西郷頼母近恵の妹）によって「厳しく躰けられ」て育つが、初等教育を終えた年の一九一〇（明治四三）年、新島襄によつて創設された同志社女学校に入ることになる。新島の妻八重（あるいは八重子）は、旧会津藩士山本覚馬の妹であり、伯父梶之助とは旧知の間柄であつた（おそろく、八重という名前はここから来ているように推測される）。また同じキリスト者として、また教育者として、梶之助と新島は気心の知れた関係であつた。そうした背景から、八重は同志社女学校普通部に入学したのである。そして一九一五（大正四）年には専門学部英文科に進学し、一九一八（大正七）年三月に同校を卒業した。そして、四月から、長崎県立長崎女学校に英語の教師として赴任したのである。なぜ実家のある東京ではなく、そこから遠く離れた長崎を選んだかという点、そこには八重なりの理由があつたようである。間接的な証言によれば、それは

「父から離れたかったから」というのが、その主な理由であった。その証言は、次のようにそのときの八重の気持ち語っている。「なぜ実家がある東京から遠く離れた長崎の女学校を選んだかというと、父から離れたかったから。父の女道楽が許せなかったからなの。父は手当たり次第に女に手を出し体の弱い継母を泣かせたわ。専門部を卒業したとき東京に帰るようにと父から命令されたけど、これでようやく父と縁を切ることができると思ったの⁵」。父彦三郎は、八重が卒業する二年前の一九一六（大正五）年四月に北京で客死しているので、この証言は事実と少し食い違う。しかし、八重の長崎行き背景に、こうした父への反感があったということは、そのまま受け止めてもよいのではなからうか。

しかし、卒業時の写真を見ると、そこには、そうした思いとは対照的に、若さと知性に溢れた生き生きとした八重の姿が写し出されている。おそらく、大きな希望と意欲を持つて長崎での生活が始まったことであろう。正に春爛漫とも言える二一歳の春であったに違いない。しかし、その約一年後、八重の体にある異変が生じる。腕に吹出物のような斑点が現われ、体調も崩してしまうのである。そこで、福岡にある大学病院で検査を受けることになった。大学病院を訪れたとき、教授がたまたま留守であったため、若い医師に診てもらったようである。しかし、検査を受けたところ、その結果は何も告げられることはなかった。告げられないどころか、すぐに隔離され、そのとき後見人となっていた伯父梶之助が呼ばれたのである。そして、病名は知らされず、ただ「よくない病気なので空気のように静養するように」と言われたのである。そのとき、八重の頭に浮かんだのは、「性病」という文字であった。父の女道楽が引き起こした病ではないのかと思つたのである。先ほどの証言は、そのときの八重の思いをこう語っている。「あたしは父の女道楽が原因で先天的に受け継いだ性病ではないかと察したわ。いくら父から遠く逃れて長崎まで行っても、あたしの体の中には父の血が色濃く刻印となつて打たれていると、気が狂わんばかり

に口惜しかった」。

病名を告げられないまま、八重は、九州から御殿場の神山復生病院へ、伯父と伯母（井深登世^⑦）によって連れていかれたのである。そして、そこに到着して初めて、その診断結果が、「ハンセン病」であると知るに至ったのである。それは、八重、二二歳のときであった。すでに縁談の話もあり、正に人生の春爛漫のときに、一挙に生き地獄へと突き落とされることになったのである。当時の日本社会にはハンセン病に対する理解はなく、それはしばしば呪われた「恥ずべき業病^⑧」として人々から忌み嫌われ、社会から完全に隔離された生活を余儀なくされていた。そして、八重も突然そうした生活へと追いやられることになったのである。そのときの八重の絶望は如何ほどのものであったろうか。八重は、後に、そのときの心境を次のように記している。

「私が、こちらに参りましたのは、大正八年の夏、丁度、ドルワル・ド・レゼー師が五代目院長として就任されてから二年目の夏でした。何処へ行くとも教えられぬままに着いたところは、何となく、うす気味のわるいこれが人の住家なのだろうかと思われるような、木立に囲まれた灰色の建物がたち並ぶ一角でした。やがて木立の間をゆくと、一軒の洋館があつて、通されましたのは院長室でした。黒のสูータンに白髪温顔の外人は、初めて見るカトリックの司祭でした。『私が院長です』と挨拶され、付添いの伯父伯母との会話の中から、ここがらいの病院であること、そして私が何の為にここにつれて来られたかを、初めて知った時の私の衝撃！それは、到底何をもって、表現することは出来ません。

やがて付添いの伯父が申しますのに、『あなたの病気は、まだはつきりしたことは、わからないけれど、一年位ここで静かに様子を見るようにとの、医者のおすすめですからしばらくここで辛抱するように』と云われ、私

は余りの心細さに、伯母に向かつて『一晩だけでもよいから一緒にいてほしい』とせがみましたが、伯母は『それは、病院の規則で許されていないから』と云って私独りをのこして去りました。きのうまで住みなれた生活環境とは余りにも隔たりのある現状に、私は、悲痛な驚きと恐怖に怯える毎日でした^⑧。

ここに記されている伯父の言葉、「あなたの病気は、まだはつきりとしたことは、わからないけれど」というのは、少しでも八重を慰めようとする婉曲的な言い方であって、「ハンセン病」の宣告を受けたことに変わりはない。八重自身、そのとき受けた衝撃を、「到底何をもつても、表現することは出来ません」と語っているように、それは言語に絶するものであったことだろう。そして、その絶望のどん底で、おそらく、ただ涙を流すしか如何ともなしえなかったに違いない。先ほどの文章の後で、八重自身こう綴っている。「誰にも極秘の中に消えるように去った私ですが、その居所を求めて友達や教え子からの手紙の束が回送されて来るたびに、私はその一つ一つをくいいるように読みふけり、人の心の温情に流せる限りの涙を流してみずからの慰めとしていた幾夜かを過ごしました^⑨」。

(三) レゼー神父との出会い

しかし、そうした生活にもかかわらず救いがあつた。それは、当時神山復生病院の第五代院長をしていたフランス人のドルワール・ド・レゼー (Drouart de Lezey, Lucien) 神父の存在であつた。レゼー神父は、八重を信仰に導く一方、八重の知性のすばらしさを知り、自分の助手として指導したのである。八重は自分のために建てられた家から毎日レゼー神父のもとに通い、神父を助けながら、少しずつ生きる力を回復していった。そして、このレゼー神父をとおして、新しい世界へと目を開かれることになつたのである。

レゼー神父は、牧野氏の小伝やいくつかの資料を総合すると、一八四九（嘉永二）年四月二十七日、北フランスのダンケルク市の貴族の家に、兄三人姉五人の九兄弟の末子として生まれた。父は裁判官であった。経歴を簡単に辿ると、一八六九（明治二）年パリー外国宣教会に入会后、七三（明治六）年、司祭に叙階され、同年九月、後に神山復生病院を開設することになる同級生のテストヴィド神父と共に来日する。その後、初め東京神田猿樂町にあった神学校付属聖堂（神田教会）で奉仕したあと、七五年からは新潟、佐渡、および北陸各地で布教をし、さらに仙台、松本、甲府などで活動し、九七年東京の関口教会の主任司祭となった。その活動は非常に広範囲に渡るもので、各地にその足跡を残している。

—そうした活動に加え、レゼー神父にはもう一つ特筆すべき働きがあった。それは、文筆活動である。レゼー神父は、一九〇九（明治四二）年、関口教会の敷地内に「教学研究鑽和佛教会」を設立し、冊子の出版をとおしてカトリック信仰を日本に紹介しようとしたのである。明治期のカトリックの出版事業について調査している牧野多完子氏によると、「同協会は、信仰と科学とは相反するという一九世紀以来の誤謬の是正と教化を旨とし、哲学・宗教・教育・道徳・時事・社会・科学などの各分野にわたりそのための小冊子を刊行するトラクト運動を行なう目的で、発足した」のである。したがってまた、「その出版事業は救霊の問題を扱うのではなく、教育や国家・社会の在り方を説き、或は医学者が奇跡の実例について著すなど、キリスト教が国体に合致せぬという当時の時評を、学術的根拠に基づいて反駁し護教している」^①。すなわち、救霊ではなく啓蒙を目的とする冊子の出版をとおして、レゼー神父はカトリック信仰の普及を目指したのである。そして、そのために、神父自身も少なからぬ冊子を執筆することになった。^①しかし、その事業は、九年後、新しい勤めへの召しのため中断されることになる。そして、その新しい勤めというのが、神山復生病院の第五代院長としての仕事であったのである。

レゼー神父が神山復生病院に赴任したのは、一九一八年のことであった。それは、ヨーロッパでは第一次世界大戦が終了した年であるが、その影響を受け、ヨーロッパからの寄付金は激減し、神山復生病院は経済的に最も苦しい時期にあつた。そうした時期に院長に就任したのがレゼー神父であつた。その辺の事情について、ある記録には次のように記されている。「同病院は別に基本金を有せず、其の経営の諸費は皆慈善家の喜捨にまち、尚其の金額の五分の四は、欧米の慈善家から仰いでいた。さすが欧州大戦の開戦と共に、其の寄附金はにわか減り、加うるに物価の値上りは総ての費用を倍加し経営は日に日に困難になつて来た。神父が故国にのこした先祖伝来の私財を惜気もなく、かたづけしから売りつくして、患者の糧に代えたのもこの頃である。果ては老の身を各地に運んで、必死の努力で寄附金を募つた¹²」。この文章だけからでも、レゼー神父がどれほど多くの労苦を負つたかが推察できる。幸い、経済的問題は、国内からの支援が徐々に増える中で少しづつ改善されていくことになるが、しかし、それ以外にも問題は山積していた。そうした経営者としての労苦の中で、レゼー神父は、ハンセン病患者の一人ひとり深く愛し続けたのである。先ほどの報告は、さらにこう記している。「神父はまことに、心から癩病患者を愛された。この世から捨てられ、親しい人々からさえ追われた不幸な群は、神父の熱い愛の翼のもとにかばわれた。胸にまで達する銀のひげ、慈愛の光にみちた碧いひとみ——患者達は神のみ姿として神父を伏し拜んだ。かつては世をのろい、親兄弟をにくみ、神仏をさえうらみつつ、この門をくぐつた彼等は、今や神父の偉大なめぐみに救われて、神を信じ、死後のよりよき生命の確信を得て、ほがらかに嬉々として平和な年月を送つて¹³いる」。患者たちがレゼー神父を「神のみ姿として伏し拜んだ」というのは、決して誇張した表現ではないであらう。レゼー神父は、心から患者一人ひとりを愛したのである。そして、その愛に包まれて、患者たちは喜びを持って過ごすことができたのである。以下に記すように、レゼー神父が臨終の床で語つた言葉が残されているが、そこには、この愛が永遠に木霊し

ているように思える。

「私はこの病院長として死ぬことを最も栄光に思います。私の神学校時代の友達の中では、今ではローマの教会で、カルジナル「枢機卿」という最高位の聖職者になつてゐるものもあります。ところが私は癩病院の院長です。天主教の神父の仕事の中で、癩病院の院長より下の役はありません。けれども私はその最も下の役になつた事が大きな喜びです。私は今死にます。私は患者の墓地のまん中に埋められます。そして墓のかざりもすべて患者とおなじでなくてはいけません。此の世の終りには、公審判と言つて神様が全世界の人間の靈魂を墓地からお呼びになつて、その生前の行を御審判になる日が来るのです。その時こそ私は何百人もの患者の魂をつれて勇ましく神の前に出ます。ああ早くその日の来る事を望みます」。

八重自身、こうした愛の鬼神とも言えるレゼー神父と出会うことになつたのであるが、その辺りのことについては、八重の一文「道を来て」の中に、短いが感動的な文章で、以下のように綴られている。「ドルワル院長は、毎日必ず病室の他に、作業をしている患者さん達を見舞い、諧謔をとぼしたりして、みんなを笑わせたりしておられました。私のところへもよく北の窓から読み終えた英字新聞などをもつて見舞つて頂き、時折人生問題や宗教のことなどを話され、洗練されたユーモアのあるお話は興味深く伺いました」¹⁵。気さくで、ユーモアに満ちたレゼー神父をおとして、八重は次第に心を開かれていつたのである。そして、その生き方をおして、レゼー神父の人柄に深く触れることになつたのである。「道を来て」は、さらにこう記している。「当時のらい者は今日では到底見ることも出来ないような重症者の多い時代でしたが、そんな中で同胞さえ、親兄弟でさえ、捨ててかえりみないこのような

病者のために、地位も名誉も学問、財産などすべてを捨てて、この子等の為には如何なる苦難もいとわぬ迄に捧げつくした宣教師達、そして今、眼のあたりに見るドルワル院長の人柄に私はすっかりうたれてしまいました⁽⁶⁾」。

八重は、レゼー神父の人柄をとおして、そしてまた後で見るとおして、新しい世界へと導かれていったのである。そして、それと共に、八重の心の中には、次のような思いが湧き上がっていったのである。

「信仰の故とは云いながら、故国を遠く、風俗習慣すべて異なるこの見知らぬ国へ渡り、このような病者をわが子と呼び、御自身もその親ともなつて尽して下さるそれらの偉業に対し、日本人としてだまつていてよいのだろうか、私はしみじみと考えました。何のとり得もない自分ではあつても、何か出来ることをしてすべての日本人に代わつて、これらの大恩にご恩返しをしなければならぬと、前後を顧みずただこの一念に燃え立ちました。もし許されるなら、このお年を召された院長のお手伝いをして病院のために働くことが出来れば本望であると、心の中に考えておりました⁽⁷⁾」。この「本望である」と言い切れたとき、八重は「ハンセン病」という絶望のどん底から這い出し、新しい命に生まれ変わつて行つたのではなからうか。そして、それは、レゼー神父との出会いによつて生み出された新しい命であつたのである。

(四) 誤診

そんな中、思いもかけないことが起こつた。入居してから三年ほどしたとき⁽⁸⁾、あまり病状の進展の見られない八重に、レゼー神父が東京の皮膚科の権威にもう一度診察をしてもらうようにと勧めたのである。しかし、そのとき八重は迷つたようである。というのも、診断の結果がどちらに出ても、大きな問題が残るよう感じられたからである。そのときの八重の思いを、あの間接的な証言は、次のように記している。

「婦長は病気に對する覚悟がようやく定まり、この病院でレゼイ神父の秘書をしながら一生を過す決心をしたばかりのときでした。生きる目標も自分の居場所も一生の仕事も、苦悩の末に見出し得たのでした。そのすべてを根底からくつがえすほどの診断を受けるようにとすすめられ、婦長は迷うばかりでした。一縷の希望を抱いて診断を受け、やはり病氣であるとの結論を得るとすれば、再び氣落ちをくり返すことになる。万が一病氣ではないという結果を得ても、周囲が一年前とすっかり變つてしまつて、今さらどうしようもない。親戚のすすめで戸籍を抜き、勤めていた女学校、多くの友人、親類縁者、そのすべてと縁を切りました。いわば無国籍で行方不明の状態になつてゐるのに、それを今さらどう修復できるのでしようか」¹⁹⁾。

おそらく、この証言にあるように、八重は大いに迷つたのではなからうか。しかし、八重はレゼイ神父の勧めを受け、一九二二年の秋、「当時、世界的にも有名であつた皮フ科の大家土肥慶藏博士」を紹介され、診察を受けたのである。そして、一週間にわたる精密検査の結果、何と「ハンセン病」とは誤診であることが分かつたのである。そのときの八重の驚きは如何ほどのものであつたらうか。しかし、それは單純に、「ハンセン病」でなくてよかつた、嬉しいという思いではなかつたであらう。むしろ、それ以上に、八重は深い混乱を覺えたのではなからうか。先ほどの証言は、このとき、八重が深刻な苦悩に陥つたことを語つてゐる。

「二転三転する運命に婦長は思考力を失い、氣力も判断力も失いました。薬局で睡眠薬を手に入れて、着物の裾を固く縛り裾が乱れないよう氣をつけ、二錠三錠と薬を口にしましたそうです。意識を失う前に自分が失禁しつゝあることを知りました。女学校の先生をして自分が失禁したまま死んだ姿を人に見られる。それに氣づ

くと最後の力をふり絞って着替えのために立ち上りました。その途端葉を吐き出してしまったそうです。

この証言もほぼ事実ではなからうか。おそらく、神山復生病院に入ったときも、何度となく自殺を考えたのではなからうか。しかし、そのときは、それを実行することはなかった。だが、「ハンセン病」ではないということが分かったとき、八重はそれを実行したのである。それほどまでに、運命の気儘さに翻弄され、「気力と判断力」を失い、混乱の中に陥ったということではなからうか。しかし、八重は再びこの混乱の中から立ち上がったのである。そして、その力を与えたのは、レゼー神父への思いであったのである。

八重から「ハンセン病にあらず」という報告を受けたとき、レゼー神父は、当然のことながら非常に喜び、八重に「ここから」、すなわち療養所から自由に出てよいこと、また必要ならフランスに渡って生活できるよう手配をしようとして申し出たのである。それは、当時、一度「ハンセン病」の施設に入った者は、社会復帰が事実上不可能であったからである。しかし、自分の人生を決定する岐路に立たされたとき、混乱の中にありながらも、八重の心はずでに決まっていたのである。先に見たように、そのときまでに、八重の心の中には一つの思いが湧き起こっていたのである。それは、フランスから日本にまで来て、しかも人々から忌み嫌われ、同胞の日本人ですら手を差し伸べようとしなかった「ハンセン病」の人たちのために、命をかけて仕えているレゼー神父を残して、日本人として「ここを出ることはできない」という思いであった。そして八重は、終に、「もし許されるならばここに止まって働きたい」とレゼー神父に申し出たのである。そして、レゼー神父もまた、「この希望を祝福して受け入れ」たのであった。²⁰

(五) 婦長としての歩み

その後八重は、年若いレゼー神父を助けるために医師になることを考えるが、そのためにはかなりの時間が必要とされた。そこで、それを断念し、短期間でなれる看護婦を目指すことにし、一九二三年四月、半蔵門にあった日本看護婦学校速成科に入学する。そして同年九月、そこを卒業するとともに検定試験を受けて合格し、直ちに神山復生病院に戻り、看護婦として、また翌年からは婦長として、レゼー神父を助けることになったのである。そして、一九七八年に現役を引退し、名誉婦長となるまで、五五年に渡ってハンセン病患者の人たちに仕えたのである。その奮闘振りの一端について、先ほどの間接的な証言は次のように記している。

「わたしも発病したとき土蔵に隠れていましたが、土蔵に隠れたまま最期を迎える患者が数多くいました。噂を聞き伝えて土蔵へ病人を迎えに行くのも婦長の大切な仕事です。山梨県の山あいの村へ迎えに行つたとき、土蔵の戸を開けて入つて行くと、黒い小さな生きものがいつせいに逃げ去りました。

暗い中に眼が慣れてくると黒い生きものは鼠だったので。病人の足の傷に鼠がたかつて嘔つていたので。神経をやられているので本人は痛くないのですが、潰瘍にとりつかれた鼠は追つても追つてもたかつてきます。とにかく病人を戸板に乗せて運び出そうと男の人に頼んで片方を持つてもらい、片方を婦長が担いでトラックに乗せたそうです。

この病院に連れて来たときは半死半生、体を洗つて診察してみると、体中に潰瘍ができていました。スポイトで傷の中に消毒液を入れると中から蛆虫が次から次へと這い出します。端から消毒液を入れると無限ともい

うほどの蛆虫が出てきます。ピンセットでつまんでは一匹一匹汚物入れの中に投げ込み、上から消毒液をぶっかけます。それでも蛆虫は死なないのです。

生きている人間を蛆虫が冒すことに怒りが爆発し、よし、一匹でも生かしてなるものかと蛆虫との格闘がはじまりました。半死半生だった患者はようやく人心地がついたのか、眼が痛い、眼が痛いと言っています。眼にはまだ潰瘍ができていないはずなのに、眼の中からも蛆虫が這い出してくるのだそうです。人間の尊厳を冒し、人間を侮辱している、と婦長は狂ったように蛆虫を殺しました⁽²⁾。

少し長い引用になったが、八重の婦長としての奮闘振りが伺い知れる文章である。その後八重は、いろいろ迷うこともあったようであるが、レゼー神父に仕えながら、「レゼイ神父の片腕として縦横無尽の活躍」をしたのである。そして、レゼー神父が一九三〇（昭和五）年に八一歳の生涯を終え、生前からの希望通り、神山復生病院の墓地にハンセン病で亡くなった日本人たちと共に葬られた後は、第六代院長として赴任した岩下壮一神父にも同じようにして仕え、看護婦として、またクリスチャンとして、ハンセン病の人たちの看護に生涯を捧げたのである。特に、レゼー神父の亡き後は、「病院の実力者」として活躍したようであり、また岩下神父に、冗談交じりに、「婦長さんの意志を変えるのは教皇さまだつてできない、あの強さは揺るがない」と言われたほど氣丈夫に振舞つたようである⁽³⁾。

その尊い働きが認められ、一九五九年には教皇ヨハネ二三世より聖十字勲章が、また日本政府より黄綬褒章が授与された。また六一年にはナイチンゲール記章が、七八年には朝日福祉賞が授与された。その間、七五年にはアメリカの週刊誌「タイム」に、「マザー・テレサに続く日本の天使」として紹介もされた。そして一九八九年、御殿場

の地で、九一歳の生涯を終えたのである。

二、信仰

井深八重の信仰へと目を向けるとき、直ちに困難を覚えるのは、ここでも八重の沈黙に遭遇することである。自分の生涯について、ほとんど語らなかつたように、信仰についても深い沈黙の中にいる。それは、その沈黙こそ、八重の信仰そのものを語るものだと言えるほどである。八重は、冒頭に記した「み摂理のままにと思ひしのびきぬなべてはふかく胸につつみて」という一句を詠んでいるが、この一句は八重の信仰告白とも言えるもののように思える。筆舌に尽くしがたい人生の荒波と試練の中に神の摂理を見、それに一切を委ね、ひたすら神にのみ信頼し、すべてを深く胸につつんで、神の御心を成し遂げるべく生き抜いたのであろう。しかし、八重の生き方に触れた者として、その沈黙にこそ耳を傾け、そこから響きだす「沈黙の響き」をかすかなりとも聞き取りたいという衝動に駆り立てられるのである。そこは、他人には踏み入ることのできない、まさに聖所であらう。そのことを思うと、身を控える方がふさわしいとも思えるが、しかしまた、そこに触れずして八重について語ることもできないように思われる。そこで、八重が残したいいくつかの手がかりを辿りながら、八重の信仰の世界を僅かながらでも探ってみたいと思う。

(一) カトリックの信仰

八重の信仰を省みると、意外と大きな要素は、それがカトリックの信仰であつたということではなからうか。

八重はハンセン病の誤診を受け、社会から隔離された神山復生病院に入り、そこでレゼー神父との出会いをおし
て信仰へと導かれたわけであるから、それは当然のことであると言えようである。それ以外の、言わば選択の余
地はなかったとも言える。しかし、八重は神山復生病院に来る前に、プロテスタントのキリスト教に少なからず接
していたのも事実である。

何よりも、すでに見たように、一時期なりとも八重を扶養することになった伯父梶之助は、若くしてプロテスタ
ントの洗礼を受け、明治学院の総理にまでなった人である（八重を引き取ったのは、ちょうど総理に就任した頃のこ
とである）。しかも、命を賭して入信したほどの人物であった。その入信の経緯については省略するが、洗礼を受け
るに先立ち、日本基督公会の長老・小川義綏から諮問を受けたとき、小川が「我が国では公然耶蘇教信者と成ると
言う事には随分危険がある。次第に依つてはそれが為に、召捕られて首を斬らるる様な事が無いとも限らぬが、そ
れでも洗礼を受けたいかどうか」と極めて厳しい質問をしたのに対して、梶之助は「言下に、固よりその覚悟はあ
りますと答えた」と回顧録に記している。梶之助が洗礼を受けた一八七三（明治六）年は、正に切支丹禁制の高札
がようやく取り下ろされた年であり（洗礼を受けたのは一月、高札が下ろされたのは二月）、まだまだキリスト教に
対する偏見と差別の根強い時代であった。それゆえ、洗礼を受けることは正に命がけのことであつたのである。そ
ういった明確な信仰を持った伯父梶之助のもとで、八重は一時期なりとも育てられたのである。またその後入学し
た同志社女学校においても、八重は深くプロテスタント・キリスト教の空気を吸つて生活したのである。後年、八
重はそこで受けたキリスト教教育を振り返り、次のように記している。「今、この時の流れを顧みて、私がこの道ひ
とすじに進み得たことは、勿論院長レゼー翁の偉大な人格とその指導によるものではあるが、これを受け入れる基
盤となつたものは、まず何よりも母校の創設者新島先生の息吹のかかるキリスト教的雰囲気の中で学び得たことに

依るものと信するのである。母校から頂いた眼に見えないたまものこそ、私の今日までの生涯を力強く支え続けた原動力に他ならないことを確信して、ただ感謝のほかないのである²⁴⁾。当時の同志社女学校は、創設者の新島襄の人格的影響が深く現れていた時代であった。また八重の同窓生は一二名であったことを思うと、人格的な触れ合いも深く、特にアメリカ人教師のメリー・デントンからは多くの影響を受けたようである。また八重は神山復生病院の礼拝でいつもオルガンを弾いていたようであるが、それはそこに行く前から身につけていたものであった。

しかし、八重はそうした環境の下で生活したが、結局プロテスタントの洗礼は受けなかったのである。八重が受けたのはカトリックの洗礼であった。それは、繰り返しになるが、当然と言えば当然である。しかし、長い間プロテスタント・キリスト教に接していたにもかかわらず、その洗礼を受けなかったのも事実である。そして、洗礼を受けたのは、運命的な仕方で神山復生病院へ行き、レゼー神父と出会ったからであった。そして、そのカトリックの信仰によって救われたのである。しかし、そこには、状況のもつ偶然性だけではなく、より本質的なものがあったとも言えるのではなからうか。それは、レゼー神父の信仰者としての生き方とおして、ある本質的なものに出会ったということではなからうか。八重が語るレゼー神父の最も凝縮された姿は、すでに一度引用したが、次の一文に良く示されていると思う。

「当時のらしい者は今日では到底見ることも出来ないような重症者の多い時代でしたが、そんな中で同胞でさえ、親兄弟でさえ、捨ててかえりみないこのような病者のために、地位も名誉も学問、財宝などすべてを捨てて、

この子等の為には如何なる苦難もいとわぬ迄に捧げ尽くされた宣教師達、そして今、眼のあたりに見るドルワルド院長の人柄に私はすっかりうたれてしまいました²⁵⁾」。(引用文のため差別語ではあるが「らしい」という言葉

八重は、生涯を捧げ尽くして神と人に仕える神父の生き方に、カトリック信仰の本髄を見たのである。そして、それによつて、救われたのである。そしてまた、八重自身が、同じように、生涯を捧げて神と人に仕える道を歩み出すことによつて、真実の希望に生きることになつたのである。そうではなからうか。そうだとすると、八重がカトリックの信仰を持ったということは、単に偶然なことだけでなく、そこには目に見えない必然性もあつたということではなからうか。

ところで、八重がいつ洗礼を受けたかは、定かではない。手元にある資料で、その点に触れているものは見当たらない。ただ、推測するに、レゼー神父の人格に触れ、その人柄に感服し、その後に従つて生きようと思ひ立つた時に、八重は洗礼を受けたのではなからうか。そして、それは、八重が神山復生病院に入つてから一年ぐらい経つたときではないかと思われる。というのも、八重は六二歳のときに、次の一句を詠んでいるからである。「祈ることおのがちからとひとすじに四十とせを重ねて今日の来にしも」。「祈ること」とは、必ずしも洗礼を受けたことを意味しないが、祈るようになった時期と洗礼を受けた時期はそう異ならないと想定してもよいであろう。その想定のもとに単純に計算すると、この一句を詠んだのが六二歳の時であるから、それから四〇を引くと、それは二二歳のときとなる。神山復生病院に来たのが二二歳の時であつたから、おそらくそれから一、二年のうちに、洗礼を受けたものと考えてよいのではなからうか。また、そのとき与えられた洗礼名は、「カタリナ」であつた。神山復生病院の墓地にある八重の墓には、「カタリナ 井深八重之墓」と刻まれている。

(二) 「空の空なるかな、みな空なり」

八重が洗礼を受けた直接のきっかけは、レゼー神父との出会いにあったことは間違いないことであろう。その人柄と生き方に圧倒的な衝撃を受けたからである。しかし、八重がレゼー神父より継承した信仰とは如何なるものであつたのか、その点を少し探つてみたいと思う。

まず気付かされるのが、八重が「道に来て」の中で触れている聖書の言葉である。その中で八重が聖書の言葉に直接触れているところはほとんどないが、ただ一箇所、旧約聖書の「伝道の書」の「空の空なるかな、みな空なり」という言葉に触れているところがある。すなわち、「レゼー神父が」聖書の句など引用され、旧約の『空の空なるかな、みな空なり。神を愛しこれにつかえるのほかみな空なり』という句も度々聞かされましたが、そのうち自分も、心からこれを味わつて唱えられるようになりました」と語っている。この言葉で興味深いのは、レゼー神父が繰り返して「空の空なるかな」という聖書の言葉を教えたということである。そして、その言葉を八重自身「心から」味わつて唱えられるようになったということである。そして、もう一点、「神を愛しこれにつかえるのほかみな空なり」とレゼー神父が教えたということである。この言葉は、厳密に言えば、そのままの形では聖書にはない。「神を愛しこれにつかえるのほか」という言葉は、レゼー神父の付加した言葉、あるいは解釈である。しかし、八重がわざわざこの言葉に触れていることから推察しても、以上の言葉は、八重の魂の救いにとって、決定的な働きをなしたと思われる。

おそらく、レゼー神父は、ハンセン病患者の現状を直視し、彼らをわが子として愛する中で、この世の空しさを一層深く感じたのではなからうか。そして、そのことを、患者たち一人ひとりに深く語り聞かせたに違いないのである。そして、それと同時に、永遠の命について語つたことも確かであろう。当時としては、ハンセン病は不治の

病であつた。そして、人々から恐れられ、忌み嫌われ、社会から隔離された生活を余儀なくされていたのである。

それは、社会的に見れば、正に生ける屍のような状態であつた。そして、この現実ほど、この世の空しさを鋭く深く突きつけるものはなかつたであろう。「空の空なるかな、みな空なり」とは、おそらく何の誇張も力みもなく語られたのではなからうか。そして、その言葉は、患者一人ひとりの心に深く沁み込んでいったに違いないのである。

しかし、それと同時に、レゼー神父は父なる神の愛と永遠の生命について語つたのである。だが、それは神山復生病院の院長になつたからと理解するのは間違ひであろう。むしろ、この世に対する空しさも、そしてそれ以上に永遠の生命に対する確信も、キリスト者として神に仕える道を選び取つたときに、深く悟つたことではなからうか。

すでに触れたように、レゼー神父は、神山復生病院に来る前は、出版の事業にかかわり、自らの多くの冊子を執筆したが、その代表作の一つに『真理之本源』というのがある。この中でレゼー神父は、キリスト教の真理を、あえて通俗的な議論の中で論じているが、その中で語られている重要なことが、靈魂不滅と死後の復活と審判についてなのである。²⁶先に引用した臨終の言葉にも、最後の審判への確信が大いなる希望を持つて語られていたが、それはレゼー神父の信仰の本質を成すものであつたのである。ただし、この確信が、神山復生病院の院長になることによつて一層深まつたということと言えるかもしれない。

レゼー神父の後を受けて第六代院長になつた岩下壮一神父は、このようなことを語つている。「考えてみるがいい、原罪なくして癩病が説明できるか。また靈の救いばかりでなく、肉体の復活なくして、この現実が解決できるのか」²⁷。岩下神父は、神山復生病院に来る前からここに出入りし、その有様を知つていたにもかかわらず、院長として赴任して、改めてその厳しい悲惨な現状に直面したとき、原罪の問題と死後の復活について深く問い直すことになつたのである。そして、またこも語つている。「生きた哲学は、現実を理解し得るものでなくてはならぬと哲人は云う。

然らば凡てのイヅムは、顕微鏡の一癩菌の前に悉く瓦解するのである。…その「癩菌の」無限小の裡に、一切の人間のプライドを打破して余りあるものが、潜んでいるのだ。私はこの一癩菌の故に、心より跪いて『罪の許し、肉体の復活、終りなき生命を信じ奉る』と唱え得ることを天主に感謝する²⁸」。この告白は、レゼー神父の告白として聞いても、あながち間違いだとは言えないのではなからうか。そして、おそらく、それは八重にまで及んでいる信仰であるといつても過言ではないのではなからうか。おそらく、レゼー神父も岩下神父も、そして八重自身も、神山復生病院でハンセン病患者たちと共に生きる中で、一方では改めてこの世の空しさを深く見つめさせられ、また他方では永遠の生命を一層高く見上げる信仰を養われることになったのではなからうか。そして、その二つの世界を切り結ぶものとして、神に仕えていく道が一層真実な道として示されていったのではなからうか。それは、以下で見る「一粒の麦」として生きる生き方である。それは神の聖旨に生きるという肯定的・積極的生き方でありながら、同時にその中に死を包含している生き方である。そういった生と死を止揚するような生き方へと、神父たちをとおして八重自身も押し出されていったのではなからうか。そして、その生き方を生み出し、支えたのが、「空の空なるかな、みな空なり。神を愛しこれにつかえるのほかみな空なり」という信仰であつたのである。そうではなからうか。

(三) み摂理のままに

「一粒の麦」としての歩みに触れる前に、それに先立って重要なもう一つの点は、「み摂理のままにと思ひしのびきぬ」と詠まれている「み摂理」である。摂理とは、『新カトリック大事典』によれば、「神が宇宙万物および一人ひとりの人間を知り、保持し、神が定めた目的に達するよう慈しみ深く導く、その神の働きをいう」とある。英語

で言えば providence である。これは、ラテン語の providentia から来ているが、これは pro 「前に、予め」と videre 「見る」からなり、元々の意味は、予め先を見ることといった意味である。そこから、予め先を見て「備える」という意味が生じ、先ほど見た、神の特別の働きを意味するようになった言葉である。八重がこの「摂理」という言葉を心に刻んでいたということは、その教奇に満ちた生涯を思うとき、特に重要な点ではなかるうか。

不思議なことに、「ハンセン病」との診断が誤診であることが分かったとき、八重の口から不平や非難の言葉は聞かれなかった。確かに、度重なる人生の荒波に翻弄され、自殺の手前まで行つたかもしれないが、そうした声は聞こえなかつたのである。誤診を受け、「よくない病気なので空気のよいところで静養するように」と言われたときは、それは父親から伝わつた「性病」かもしれないと思い、「気が狂わんばかりに口惜しかった」という経験をした八重が、である。ただ、それは言葉となつていないだけで、心の中では、非難めいた言葉もあつたのかもしれない。それは分からない。しかし、それはほとんどなかつたのではないかと思えるのである。それは、「誤診」との診断が出る前に、八重の心はすでに定まつていたからである。その出発点は、あくまでも、自分が「ハンセン病」患者であり、一生療養所を出ることはできないという前提の下ではあつたであろうが、しかし心が定まつたとき、八重は「ハンセン病」そのものを超えてしまつたところがあつたのではなかるうか。レゼー神父を助けて歩んで行こうとの思いが定まつたとき、それは自分が「ハンセン病」患者だからということではなく、それが自分の果たすべき勤めであるとの思いに全重心が移されて、もはや「ハンセン病」ということ自体超えられてしまつたように思えるのである。確かに、再検査を受けるようにと勧められたときは迷いを感じ、誤診との結果に対しては混乱に陥つたが、しかし、その根底においては、すでに「ハンセン病」であること自体を超えたところがあつたのではなかるうか。また、だからこそ、誤診であることが判明した後も、神山復生病院に残る決心ができたのではないだろうか。そして、

そこに見えてくるのが、この「摂理」信仰なのである。八重がその「摂理」という言葉を明確に自覚したのはいつのことか分からない。しかし、すでにこのとき、単なる運命の翻弄ではなく、それを超えるものを意識し出したのではなからうか。一切を受け入れ、そこに神の慈愛に満ちた導きのみ手を見る信仰に目覚めていったのではなからうか。「ハンセン病」との誤診も、神山復生病院に入ったことも、そしてレゼー神父と出会い、新しい道に進もうとしていることも、すべては神の導きの下にあつたことであり、その導きのみ手に身を委ねることこそ、人間としての本分であると考えようになつたのではなからうか。もしかすると、「摂理」という言葉で自分の人生を明確に捉えられるようになったのは、もつと後のことかもしれない。しかし、その出発点は、すでにこのときにあつたように思うのである。また、逆に言えば、この摂理信仰がなかつたならば、八重の心と生活は、誤診が明らかとなつたところで、空中分解してしまつたのではなからうか。そして、事実としては、おそらくその瀬戸際まで行つたのである。しかし、そのときも、偶然にその難を逃れたのである。「み摂理のままに」と語るとき、おそらくそのことも含めて語られたのではなからうか。そして、一切のことを含めて、「み摂理のままに」と信じ、日々を歩み続けたのではなからうか。

ところで、八重が語る「摂理」ということの中には、誤診から始まる八重の第二の人生のことだけではなく、それに先立つ人生、そしてその背後にある会津という世界が含まれているように思える。会津の悲運と自分の人生を、八重はおそらく重ね合わせて考えたことであろう。そうした会津の歴史と運命を背負いながら、八重は一人のクリスチャンとして歩んだのではなからうか。そのことを思うと、八重の信仰の中には、会津人としての歩みも込められていたということになるであろう。ただここでは、そのことについてはこれ以上触れないことにする。

(四) 一粒の麦として

八重の墓には、「一粒の麦」という墓碑銘が刻まれている。それは八重の自筆である。おそらく、好んでこの言葉を書いたものと思われる。それは、この言葉こそ、自分の生涯を語るみ言葉であることを見て取ったからであろう。そして、その中には、自分が師と仰いだレゼー神父の生涯も含まれていたことであろう。

改めて言うまでもなく、この言葉は、イエス・キリストが死を前にして語った言葉である。「よくよくあなたがたに言っておく。一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる」(口語訳聖書、ヨハネによる福音書一二章二四節)。イエス・キリストは、たった一粒の麦であっても、「もし死んだならば、豊かに実を結ぶようになる」と語った。一粒の麦は、死ぬことによつて新しい命を芽生えさせ、多くの実を結ぶからである。したがつて、それは死ぬことによつて豊かに実を結ぶ生き方であり、それは先に触れたように、生の中に死を包含した生き方、生と死を止揚した生き方なのである。そして、それは、繰り返しになるが、この世の空しさを見つめながらも、神の永遠の世界を見上げる中で生まれてくる生き方なのである。八重は、自分の歩みを振り返り、次のように述懐している。「思えば、恩師レゼー師には、大正九年から昭和五年までの一一年間お仕えしたことになります。悲しみのどん底からこの私を救い上げて、人生の意義を説き、永遠の真理に向つて生きぬくことこそ聖旨の道であることを教えられ、その道に励み続け、ただ、今日一日を大切に努めて参つただけの私であります」。「永遠の真理に向つて生きぬくこと」を神の聖旨と信じ、「今日一日を大切に」生きたのである。しかし、その一日一日は決して平坦なものではなかつたであろう。この言葉に続いて、八重は「み摂理のままにと思ひしのびきぬなべてはふかく胸につつみて」の一句を添えているが、「なべてはふかく胸につつみて」という言葉の奥には、他人が入り込めない深い苦悩の人生があつたに違いないのである。前にも引用

した、八重について間接的に語っている証言には、八重の内的葛藤についての次のような文章が見られる。

「自ら進んでこの病院に献身しようと看護婦になったつもりでも、心の中では後悔したことが何度もあったそうです。膿でござわになつたガーゼやほうたい、かさぶたのついた着物などを洗濯していると、つき上げてくる吐気に耐えられなくなります。鼻を刺す嗅気に息が詰りそうになります。いつ病院から逃げ出そうか、いつ看護婦をやめようか、やめさえすれば苦しみから逃れることができるかと何度も思つたそうです。

けれども鼠に齧られて、なすすべもなく真暗な中に転がつていた患者が、赤ん坊のようなつややかな肌になつてゆく状態と接していると次第に離れられなくなるのだそうです。わずかに病苦が軽くなり自分から申し出て受洗し、思いも及ばないほどの信仰の道を深く進みながら聖者の姿に変えられてゆく。文字も読めない人が、病苦や祈りに潔められて驚くほどの信仰の境地に達するのを眼の前で見ます。

レゼイ神父は感動のあまりに泣き出され、つられて婦長も感泣し、このようなすばらしい経験をするのだから逃げ出さずに居ようと思ひ返すのだそうです²⁰」。

おそらく、ここで間接的に証言されている「後悔」ということも、実際あつたのではなからうか。それも、一度のみならず、繰り返しあつたのではなからうか。しかし、そのたび毎に、レゼイ神父に仕えていく歩へと引き戻されていったのもまた事実であらう。そうした内面の揺れを繰り返しながら、神の聖旨を求め、ひたすらに生きる歩みへと導かれていったのではなからうか。「なべてはふかく胸につつみて」という、この一句に込められた八重の本當の思いは到底知るすべもないが、そこにはそうした痛みも深く秘められているように思えるのである。しかし、

それが死して生きるということではなからうか。生きることにおいて、それはあくまでも人間としての生を生きることであり、神の聖旨に死すと言つても、人間の生を生きるのである。そこには、当然、人間の生のもつ弱さ、迷い、苦悩の多くが残されているのである。その一つ一つと深く対峙しながら、そして時にはそれに翻弄されながら、なおそれを乗り越えていくところに、この一粒の麦としての歩みがあったのではなからうか。

(四) 信仰の実り——八重をめぐる人々

この井深八重の生き方は、神山復生病院でハンセン病に苦しむ人々にとつて希望の光となつたばかりか、その生き方に触れた多くの人たちの心をも照らすことになつた。最後に、そのうちの二人に触れて、このささやかな文章を締めくりたいと思う。

その一人は、牧野氏も『人間の碑』の中で紹介しているが、日本における福祉事業の開拓者の一人である阿部志郎氏である。阿部氏は、二〇〇七年三月まで、五〇年間、横須賀にある「横須賀基督教社会館」という福祉施設の館長をされた方であるが、この方も井深八重から大きな影響を受けた一人である。阿部氏は、一ツ橋大学を卒業する前年の一九四八年、この神山復生病院を訪問したが、そのとき期せずして井深八重に出会うことになつた。氏はそのときのことを次のように語っている。「美しい——。微笑をたたえた平安な顔と、テキパキ包帯を捲いているダイナミックな行動とのコントラストの見事さ。その人柄がかもし出すしなやかさと温かさが強く心を打つ。突如湧き出すように、『これらのいと小さき者のひとりになしたるは、我になしたるなり』（マタイ二五・四〇）のキリストの御言葉が迫ってきた。ひとり、『ひとり』の意味する重さとともに」。阿部氏は、ハンセン病の患者一人ひとりに生き生きと接している井深八重に出会つて、そこに「いと小さき者のひとりに」喜んですべてを献げようとし

ている姿を見たのである。そして、そのとき、阿部氏は「この看護婦さんの後を、私もついていこう」という秘かな思いを与えられたと述懐している。その後阿部氏は、三一歳のとき、明治学院大学の教員を辞し、「横須賀基督教社会館」の第二代館長に就任したが、その福祉者としての原点は、この井深八重との出会いにあつたのである。^①

またカトリック作家の遠藤周作も、八重から深い感動を与えられた一人である。氏の小説に『わたしが・棄てた・女』という作品があるが、このモデルとなつたのが、井深八重である。遠藤周作自身、おそらく重い肺病などを患う中で、井深八重の生き方に深い共感を覚えたのではなからうか。この小説は、彼自身、神山復生病院を訪れ、直接取材して書かれたものである。これは後に、熊井啓監督によつて映画化されたが（題名は「愛するこ」、ストーリーは必ずしも八重の生涯をそのまま辿つたものではない。ストーリーを簡単に紹介すると、町工場で働く主人公の森田ミツは、ごくありふれた、しかし孤独な生活を送つていた。やがてミツは、やはり同じく孤独に生きていた青年と出会い、恋に落ちる。しかし、その矢先に、ミツはハンセン病との診断を受け、やむなく恋人と別れ、北アルプスの麓にある療養所に入るのである。そして、そこで多くの患者たちと生活を共にする中で、その一人ひとりの苦悩に深く触れていくことになる。しかし、やがて自分が受けた診断が誤診であることが分かる。そして、嬉しさのあまり、一旦は他の患者のことなど忘れ療養所を出るのであるが、しかし、しばらくして、自分に親しくしてくれた患者たちのことを思い起こすと、そのまま元の生活に戻ることはできず、踝を返して療養所に戻るのである。そして、患者たちの世話をしながら生きるという新しい道を歩み出すのであるが、そんな矢先に交通事故に遭つて死んでしまうのである。この小説の最後で、遠藤周作は、こういう言葉を記している。「もし神が私に一番、好きな人間はときかかれたなら、私は、即座にこう答えるでしょう。ミツちゃんのような人と。もし神が私に、どういふ人間になりたいかと言われれば、私は即座に答えるでしょう。ミツちゃんのような人と。……」^②。遠藤周作のみなら

ず、こういう存在に、そしてその背後にある八重自身に、人々は深く慰められるのではなからうか。

おそらく、八重自身は、自分がどのように人々から注目される存在になるとは露も思っていないか。ただレゼー神父の生き方に感動し、自分もその後に従おうとしただけなのではなからうか。「み摂理のままにと思いのびきぬなべてはふかく胸につつみて」の一句に語られているように、運命のいたずらとも思える「ハルセン病」という誤診の中に神の摂理を見、キリストの光を輝きだすレゼー神父に照らされてその後に従い、社会から見捨てられた人たちに仕えることを、ただひたすら自分の使命として歩んだだけなのではなからうか。しかし、そのように、一粒の麦として「いと小さき者」のために死に、そして生きたとき、その存在自体が大きな希望の光となつて照り輝き、多くの人たちに感動と力を与えることになつたのである。

(注)

- (1) 八重は何箇所かでの句を記しているが、表記の仕方は必ずしも一定ではない(「忍びきぬ」とか「深く」などと漢字が用いられているものもある)。本論では、八重自身が書いた「道を来て」という文章に記されているものを用いる。
- (2) *Pestevide, German Leger* (1849.10.2-1891.8.3)「東海道諸地方にカトリックの基礎を築いたバリー外国宣教会宣教師。フランスのラングル地区内のティヴェに生れる。一八七三年六月司祭叙階、同(明治六)年八月来日。初め横須賀の聖ルイ教会で横須賀海軍工廠に雇われていたフランス人の技師や職工約四〇名の司牧を担当しつつ、日本語を学習。七五年横浜に移り、一時北緯聖会の会計を担当。同時に神奈川県伝道に従事し、七七年砂川(現・立川市)と八王子の両村(当時は神奈川県)で信徒団を設立。八〇年、神奈川県から岐阜県にかけての東海道筋伝道者に任命され、約三ヶ月を要して全地域を数回巡回。八三年には、先にヴィグルース・F・Pやルコント・D・Aらから受洗していた信徒も加え、担当地域に散在する信徒数が一五〇〇名を超えた。また八六年一月、水車の上の丸太小屋に隔離され

て既に失明していた三〇歳余の婦人ハンセン病患者に授洗、その後もハンセン病患者五名の世話を続けた。八九年一月、御殿場郊外に神山復生病院を設立、入院患者は同年末で一四名、九〇年末で四二名に達した。満足な食事もとらず長年激務の中を伝道に励んでいたが、九一年春ついに病臥し、五月末香港の宣教師養成所に向け離日、同地で胃癌のため永眠した。」(『日本キリスト教歴史大事典』八九八頁)。なお、個人名のカタカナ表記は、時代によっても個人によっても異なるため、引用文などでも一々訂正することなく、そのまま用いる。

(3) 「人間の碑」刊行会代表牧野登、『人間の碑——井深八重への誘い——』、井深八重顕彰記念会、二〇〇二年。

(4) 一九九二年、日本テレビ「知ってるつもり」で放送された。また一九八三年には、NHKのテレビ番組「こころの時代——悲しみを超えて」に出演している(このときのインタヴューは阿部志郎氏)。

(5) 重兼芳子『闇をてらす足おと——岩下壮一と神山復生病院物語』春秋社、一九八六年初版、一九九九年。七八〜七九頁。本書は、神山復生病院に五〇年以上患者として過ごした老人の証言をとおして、岩下壮一の復生病院での活動とその面影を辿ったものであるが、その中に、井深八重のこともしばしば出てくる。この老人は、八重ともかなり心を開いて話が出来たようで、読み物という性格上、ここに出てくる八重の言葉は厳密なものとは言えないであろうが、しかしその内容に関しては、むしろ本音が出ており、その意味では貴重な証言ではないかと思う。そのため、本論では、この老人の証言をかなり取り入れることにした。ところで、八重が長崎に行つた理由について、牧野氏は、一方では当時長崎には旧会津藩氏が集まつており(初代長崎県知事・日下義雄、初代長崎市長・北原雅長など)、「長崎の中の会津」が形成されていたことに触れ、それが何らかの影響を与えた可能性を示唆する一方、八重の長崎行きは「偶然であったかもしれない」とも述べている(『人間の碑』八四〜八五頁)。

(6) 以上、『闇をてらす足おと』七九頁

(7) 八重は「伯父伯母」と記しているだけであつて、名前には触れていないが、牧野氏は井深梶之助と井深登世(祖母八代の姪)と判断している。また『闇をてらす足おと』では、八重は伯父と二人で復生病院へ行つたと記されているが、八重自身の証言である「道を来て」には「伯父伯母」と記されており、そちらが正しいであろう(もしかすると、途

中で合流したとも考えられる。しかし、『闇をてらす足おと』には、その道中の様子が証言されており、そのときの雰囲気伝わってくるので、以下に引用する。「叔父と二人で列車に乗った。客席には誰もいなくて叔父と二人きり、一車輻貸し切りなのね。他の車輛には駅に着く度に客が乗りこむのに、あたしが乗った車輛には客も乗らないし車掌も来ない。列車の最後部だから駅のプラットホームに止つても、もの売りも来ない。叔父がむずかしい顔をしたときどき食べものを渡してくれるだけ。どこにも乗り替えず、同じ車輛に乗せられたまま九州から御殿場まで着いたの。人力車が二台待つていたわ。あたしは花柄の銘仙の着物に紫色のはかまをはいっていた。その頃の女学校の先生は着物の上に紫色や紺色のはかまをはいっていたからなの。空気のよいところで療養すれば性病はよくなると、まだ思いこんでいたのだから無智だったのねえ。視野いっぱい迫ってくる富士山と、背中を丸くして狐色の犬が寝ているような山々の重なりを、人力車の上から眺めたわ。黒褐色の火山岩が転がっているのも珍しくて、ただあたりを見廻して「ただけ」(七九〜八〇頁)

(8) 『人間の碑』三六頁。なお、病院内では「堀清子」と呼ばれた。

(9) 同、三六〜三七頁

(10) 牧野多完子「明治期におけるカトリック出版事業——教学研究鑽和佛協会の活動を通して——」『南山大学図書館紀要』第七号(二〇〇一年)より。レゼー神父自身、その設立目的について、次のように語っている。「……天主教「カトリック教会」は今日の開けた実験学にはぬなど欺かれ、研究もせずして天主教を軽蔑して居る……之に対して如何なる方法を設けたら可からうかと考えて……此会の目的は毎年少なくとも五六種の学術的宗教的小冊子を発行する積りであります。……此会を教学研究鑽和佛協会といいます。……上流社会の誤解を解き謬想まちがい直し、天主教の真理を知らせたい……。」(同上)

(11) レゼー神父の著したものに、以下のものがある。ただし、中には、すべて口述したもの、あるいは講演で話したものを、日本人がまとめたものもある。『真理之本源』、『解疑』、『真正之新教』、『公理要義』、『善悪』、『カトリック生活のしるべ』など。

- (12) 小林珍雄『岩下神父の生涯』大空社、一九六一年、二六五頁。なお、国内からの支援について、次のように記されている。「師の慈善事業はこの頃から漸く世人の注目する所となり、寄附金も年と共に増加し、皇太后陛下に於かせられても、多額の御下賜金を給い尚数鉢の植木を添えられて老齡の師をおいたわり遊ばされた」(同上)。
- (13) 同、二六六頁
- (14) 同、二六八〜二六九頁
- (15) 『人間の碑』三七頁
- (16) 同、三八頁
- (17) 同、三八〜三九頁
- (18) 「ハンセン病」が誤診であると分かったのは、いくつかの文章では一九一九年七月の入所後一年ぐらい経ってからというのが多いが、牧野氏の調査では、それから三年後の一九二二年一〇月となっている。そこで、本文では、牧野氏にならって三年後とするが、引用文などはそのまま訂正せずに用いる。
- (19) 『闇をてらす足おと』八一〜八二頁
- (20) 『人間の碑』四〇頁
- (21) 『闇をてらす足おと』八五〜八六頁
- (22) 同、九〇頁
- (23) 工藤英一『明治期のキリスト教』一四〇頁
- (24) 『人間の碑』一一〇頁。これは、昭和五〇年五月二日に、同志社大学より名誉文化博士号を授与した折、「同志社大学名誉学位をいただき」と題して同大学発行の「しばぐさ」第一四号に記載した一文に記されている。
- (25) 同、三八頁
- (26) 演述者ドルワール・ド・レゼー、筆記兼発行者林壽太郎『真理之本源』和佛協会印刷部、明治三〇年。この書物は、昭和に至るまで二〇版以上版を重ねた。しかし、他の書物にも言えるのであるが、題名に少し変更があったりして一定

していないところがある。手許にある明治四三年版のこの書物は『真理之本原』となっている。

(27) 小林珍雄『岩下神父の生涯』二九五〜二九六頁

(28) 同上

(29) 『人間の碑』四〇頁

(30) 『闇をてらす足おと』八六〜八七頁

(31) 「敬和会」(東洋英和女学院機関紙) 一九九五年六月号より。この八重との出会いは、わずか「一五秒か二〇秒」ほどのものであり、また八重と一言も言葉を交わすことはなかったが、阿部氏はこの決定的な出会いをいろいろなところで語り、また書いている。また、八重の人柄については以下のようにも語っている。「大きなはたらきをなさつたにもかかわらず、ご自分を語らないのです。人の徳を讃えるかたでした。宗教的に言えば、神の恵をほめ讃えた、しかし、自分を語らない、です。……井深さんはいっさいの自慢話をせず、自分の業績を誇つたことがない人です。自己抑制と言つてよいと思います。これが井深さんの生き方でした。それが井深さんの大きな、目に見えないはたらきをなさしめる原動力であつたと思います」(阿部志郎『コミユニティ』海声社、一九九八年、一二三〜一二四頁)。

(32) 遠藤周作『わたしが・棄てた・女』講談社文庫、一九七二年(二〇〇六年)、二五四頁